

「さなぎ達通信」VOL26 で申請の報告を致しましたが、この度、皆様のご支援でようやく“認定” NPO 法人の資格が取得できました。認定を受けたことにより、当法人への寄附金は、所得税・相続税の控除対象となります。どうか引き続きご支援を賜りますよう、ご報告かたがたお願い申し上げます。

なお、今後、頂きました寄附金については、全て領収書を発行させていただきますので、ご自身で保管下さいませようお願い致します。なお、寄附金控除については、お近くの税務署までお問い合わせ下さい。

認定対象期間：2012/4/1～2017/3/31（期間より前のご寄附は対象外です）

《認定 NPO 法人とは》
 組織運営及び事業活動が適正であることなどの一定の要件を満たす NPO 法人に対して、個人や法人から受ける寄附金について課税上有利になるなどの恩恵が受けられる団体として、国税庁が認定するもの。
 ※詳しくは、内閣府の NPO ホームページをご覧ください (<https://www.NPO-homepage.go.jp/support/nintei.html>)

10 年未来の町、寿から
“認定”！ NPO 法人「さなぎ達」として



さなぎ達理事長
ポーラのクリニック院長 山中 修

かつては“寄せ場”とよばれた寿町は、2000 年から「さなぎ達」が介入することにより、いつしか東京の山谷や大阪のあいりん地区と路線を異にした歩みをするようになった。日本社会の未来を 10 年先取りして走り続ける街、寿。ここから日本が占める。そんな町である。

「そとぶき」から眺めた寿は総じて、「汚い。暗い。怖い。」の陰のイメージであろう。しかし、この町に関わって 12 年、回周遅れの落ちこぼれランナーである寿選手が、実は時代の最先端を突っ切って走って居ることに気づかされる。

2 年前に胃がんで亡くなった、戦後の寿で中華料理屋を営んだ老婆はこう言った。「そりゃ先生、儲かったよ～。だって 24 時間お店開けていてもお客が来るんだもの。ここの人達は 24 時間を 2 交代で勤務するじゃん。だから、仕事前の腹ごしらえと仕事後の寝る前に、みんな一杯飲んでね。今の店とは大違い。」かつての寿では、戦後の日本を底辺で支えた男達が全国から集まって、寝泊まり飲み食い打つ買うの経済活動が繰り広げられた。若く、力みなぎる男達が原発をつくり、高圧送電線の鉄塔を、高

速道路を、高層ビルを建てた。日本を創った。ベビーブーマー以降の戦後生まれの世代は、彼等が皆とで汗して運んだバナナを貴重品のように遠足の時、病気の時食べさせてもらったのである。

モノに光が当たる時、必ず影が生まれる。寿は陰影の町。時代の流れに応じて顔を変えた繁栄の影の部分だけを、一手に引き受けた街である。車が快適に高速道路を走るとき、その光の向こう側には必ず CO2 という影が生まれる。

昨年の震災後に、被災しなかった日本人は、「安心」の担保の下、こぞって募金だ、支援だ、絆だ、と「ハレ」の部分に身を置き、被災者に対してある種の優位性の心情で、「私のできることで勇気を与えたい」と、被災者の忍耐力とともに海外からの賞賛を浴びた。ところが、このような国民性に反して、街の復興には瓦礫の処理が必要となることを、非被災地域の人々は認めたがらない。瓦礫の受け入れは、自分の身に降りかかる「ケ」である。「ケ」の部分は「けが」「ケガレ」として風評否定してしまうのもこの国の人々の影の一面であろう。不要な「不安」を招き入れたくないのである。

あの統制不能の日々に原発事故の重大さを正確に情報開示することなく、可及的にことなかれ主義で済ませてしまおうと、「ケ」の回避のため本能的に動いたこの国の指導者達もまた代表的日本人である。

この12年間に寿から私が学んだことは、震災後の1年ではっきりと集約証明されたように思えない。「ハレ」だけで人が生まれ、生き、死ぬことはできない。「ハレ」の裏側にある「ケ」を否定しないで、見つめながら毎日をしっかり生きることが、いま発信されるべきではなからうか？ 一見、社会から捨てられた様にみえる寿町。

ここで7年間、人生最期の日々を過ごす人々を数多く看取った。また、その後にも家族を持たないあるいは家族に捨てられた、ニート、精神、身体、発達などの障害者や各種依存症の患者さんなどの多数の若者が寿に流れ込んでくる。「ケ」の街寿から学ぶことはいっぱいある。

これからの日本が向かう方向性は？

どこを目指すべき？ 震災後ちょうど一年経った3月11日、黙祷しながら考えていた。

いつでも10年未来の街、寿がそれを教えてくれそうだと。

退職のごあいさつ①

今春、さなぎ達のスタッフ体制が変わります。

ソーシャルワーカーとして「さなぎの家」の利用者さんの相談・支援を行っていた田中陽介、「さなぎの食堂」の店長として美味しい料理を提供してきた土谷伊麻里の2名が退職しました。

それぞれ新しい道へ進み始める2人から、皆様にメッセージをお送りします。

話は唐突に始まるがー

無謀なサバイバル生活を送る冒険家や、過去にヒッピーと呼ばれていたバンドマン・文化人などは世間からある程度認められてきた。単純な私は、同じように髭をはやし、ボロをまとう路上生活者と、彼らの間に大差はないと思いついてきた。そして、そういった生活様式や音楽を好んでいた私は、彼らと路上生活者を同列に扱い尊敬することとした。しかし、社会の見方は違う。一方は社会に存在を認められ、一方は存在を認められないものであった。幸いにもそのズレには気づいていた。

大学では福祉を学んだ。そこで、路上生活者が福祉的支援の対象であるとの講義を受けたが「尊敬する彼らが福祉の世話になどならないはず、たくましく生きているはずだ。」そう思って、「寿町」にボランティアをしに行った。最初ははっきり言ってガッカリした。町は思った以上に汚いし、炊き出しに並ぶ人々は単なる意地汚い連中に見えた。そして、私の目にも福祉的支援が必要な存在であることは明らかであった。私は、あっさりと彼らにヒーロー失格の烙印を押した。ところが何度か足を運び、しぶとく生きているありのままの彼らを見ていくうちに、「人間らしさ」そして「求められる福祉」を考えていくヒントになると感じた。だから、彼らのことをもっと知りたい、話をしたいと考えてさなぎ達で働くようになった。

そんな経緯があるので、私はこの4年間彼らを助けよう・救おうと思ったことは一度もない。彼らのことを知り、周囲の人間にその実態を伝えたかっただけだ。4年間そうしてみても、少し自己満足を得ることができた。だから、いったん寿を離れて、寿町から学んだ自分なりの「福祉観・人生観」を生かし、違った日々を過ごしてみようと思う。

皆さんも寿町に、さなぎ達に直接足を運んで欲しい。そして、素直な感想を周囲の人間に伝えてほしい。それぞれが抱いているイメージとのギャップを知ることが何より、彼らの存在を認められる温かい社会の形成につながると思う。



田中 陽介・・・2008年4月～2012年3月勤務



今号の〇〇さん

今回は、清掃ボランティアに参加されていたところに話を伺いました。珍しい苗字の由来を尋ねてみると、ご先祖は、福島の武士だったそうです。

名前:六角 利春さん(54)

趣味:釣り、ハイキング等

今の暮らしについて:

前職は、製本や JR の食堂車の清掃の仕事をしていました。酒が大好きで、泥酔し交通事故を起こしてしまいました。生死の間を彷徨い、今は役所の世話になっています。

以前は寿町のアパートで暮らしていましたが、今は南区の簡易宿泊所で生活しています。その方がお酒の誘惑も少なく、静かで良いと思っています。

今後の希望:若い時は酒やギャンブルに溺れた時期もありましたが、今は事故で痛めた身体を直すことを第一に考えています。今の境遇と仲良く付き合い、もう酒に溺れることなく、健全な身体になったら、趣味の釣りやハイキングをしてみたい。



退職のごあいさつ②

退職するにあたり、皆様に感謝申し上げます

ちょっとした好奇心から、初めて寿町に足を踏み入れ「さなぎの食堂」の店長として、気がつけば 10 年近くも経っています。「目の前にいるお腹の空いた人に、屋根の下で暖かい食事をしてもらいたい」から始まった食堂でしたが、“ローソンと提携してのもったいない運動” ““、“おかげさま宅配弁当（寄付金付弁当）”、“減塩食弁当” ‘生活就労支援の JUMP” など、様々な事業を展開して、多少の課題はありますが、現在ではスタッフやメニュー内容が充実してきたと自負しております。

この体験を通して、実に多くの思いを抱いてきましたが、振り返るとやはり人との「出会いと別れ」が非常に印象深く残っていることに気がつきました。お客様、ボランティアの方、スタッフ、寿町に何かを探しに来た人、生きがいを見つけて留まる人、ここにいるしかない人、お亡くなりになる人…。多くの方の人生の一部を垣間見ることができ、言葉ではうまく表現できませんが、ここでだから味わえた貴重な経験をさせていただいたと感謝しています。これらの経験は、今後の私の柱となると思います。

最後に、これまで活動を継続してこられたのは皆様のお力添えがあったからだ実感しております。心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

土谷 伊麻里・・・2003年2月～2012年2月勤務



新理事就任のご報告

法人としての安定をはかるため、認定 NPO 法人の申請とともに新理事の人事を行いました。退職した土谷は、理事も兼任していたのですが、退職と共に理事も退任し、新しく女性理事を 2 人迎えることになりました。

横浜を舞台とした著作も多く書かれている小説家の山崎洋子さん、そして「さなぎの食堂」設立時からご尽力頂いている前田梢さんです。詳しくは、追って通信でご紹介致します。今後は、今まで手薄になってしまっていた広報活動にも力を入れ、一層のご支援を賜れるよう努力して参ります。

データブック

| | 12月 | 1月 | 2月 |
|------------------|------|------|------|
| さなぎの家 利用者(人) | 3659 | 3494 | 3166 |
| 木曜パトロール 野宿者総数(人) | 472 | 453 | 436 |
| 寿 JUMP 参加者(人) | 2 | 2 | 1 |
| さなぎの食堂 仕出し弁当(食)※ | 38 | 110 | 93 |

※ 仕出し弁当業務は 2 月で終了させて頂きました。ご愛食ありがとうございました。

